

大つごもり

樋口一葉

青空文庫

(上)

井戸は車にて綱の長さ十二尋^{ひろ}、勝手は北向きにて師走^{しはす}の空のか
 ら風ひゆうくと吹ぬきの寒さ、おゝ堪えがたと竈^{かまど}の前に火なぶ
 りの一分は一時にのびて、割木^{わりき}ほどの事も大臺^{おほだい}にして叱りとば
 さるゝ婢女^{はした}の身つらや、はじめ受宿^{うけやど}の老嫗^{おば}さまが言葉には御子
 様がたは男女^{なんによ}六人、なれども常住内にお出あそばすは御總領と
 末お二人、少し御新造^{ごしんぞ}は機嫌かいなれど、目色顔色呑みこんで仕
 舞へば大した事もなく、結句おだてに乗る質^{たち}なれば、御前^{ごぜん}の出様
 一つで半襟半がけ前垂の紐にも事は缺くまじ、御身代は町内第一

にて、その代り吝しはき事も二とは下らねど、よき事には大旦那が甘
い方ゆゑ、少しのほまちは無き事も有るまじ、厭やに成つたら私
の所とこまで端書一枚、こまかき事は入らず、他所よその口を探せとなら
ば足は惜しまじ、何れ奉公の祕傳は裏表と言ふて聞かされて、さ
ても恐ろしき事を言ふ人と思へど、何も我が心一つで又この人の
お世話には成るまじ、勤め大事に骨さへ折らば御氣に入らぬ事も
無き筈と定めて、かゝる鬼しゆうの主をも持つぞかし、目見えの濟みて
三日の後、七歳になる嬢さま踊りのさらひに午後よりとある、其
支度は朝湯にみがき上げてと霜氷る曉、あたゝかき寢床の中より
御新造灰吹きをたゝきて、これくくと、此詞これが目覺しの時計より
胸にひゞきて、三言とは呼ばれもせず帯より先に襷がけの甲斐ノ

しく、井戸端に出れば月かげ流しに残りて、肌を刺すやうな風
 の寒さに夢を忘れぬ、風呂は据風呂にて大きからねど、二つの手
 桶に溢るゝほど汲みて、十三は入れねば成らず、大汗に成りて運
 びけるうち、輪寶りんぼうのすがりし曲み齒ゆがの水ばき下駄、前鼻緒のゆ
 るゝに成りて、指を浮かさねば他愛の無きやう成し、その下駄
 にて重き物を持ちたれば足もと覺束なくて流し元の氷にすべり、
 あれと言ふ間もなく横にころべば井戸がはにて向ふ臍すねしたゝかに
 打ちて、可愛や雪はづかしき膚はだに紫の生々しくなりぬ、手桶をも
 其處に投出して一つは満足成しが一つは底ぬけに成りけり、此桶これ
 の價あたひなほどか知らねど、身代これが爲につぶれるかの様に御新
 造の額際に青筋おそろしく、朝飯のお給仕より睨まれて、其日一

日物も仰せられず、一日おいてよりは箸の上げ下しに、此家の品このやは無代たゞでは出来ぬ、主の物とて粗末に思ふたら罰が當るぞえと明け暮れの談義、來る人毎に告げられて若き心には恥かしく、其後は物ごとに念を入れて、遂そとひに麤想そとをせぬやうに成りぬ、世間に下女つかふ人も多けれど、山村ほど下女の替る家は有るまじ、月に二人は平常つねの事、三日四日に歸りしもあれば一夜居て逃出しもあらん、開かいびやく闢やく以來を尋ねたらば折る指に彼の内儀さまが袖口おもはるゝ、思へばお峰は辛棒もの、あれに酷く當たらば天罰たちどころに、此後は東京廣しといへども、山村の下女に成る物はあるまじ、感心なもの、美事の心がけと賞めるもあれば、第一容き貌りやうが申分なしだと、男は直きにこれを言ひけり。

秋より只一人の伯父が煩ひて、商賣の八百や店もいつとなく閉ぢて、同じ町ながら裏屋住居に成しよしは聞けど、六づかしき主を持つ身の給金を先きに貰へば此身は賣りたるも同じ事、見舞にと言ふ事も成らねば心ならねど、お使ひ先の一寸の間とても時計を目當にして幾足幾町と其しらべの苦るしさ、馳せ抜けても、とは思へど悪事千里といへば折角の辛棒を水泡むだにして、お暇ともならば彌々いよく病人の伯父に心配をかけ、瘦世帯に一日の厄介も氣の毒なり、其内にはと手紙ばかりを遣りて、身は此處に心ならずも日を送りける。師走の月は世間一躰物せわしき中を、こと更に選えらみて綾羅きらをかざり、一昨日出そろひしと聞く某の芝居、狂言も折から面白き新物の、これを見のがしてはと娘共の騒ぐに、見物

は十五日、珍らしく家内中との觸れに成けり、此お供を嬉しがるは平常のこと、父母なき後は唯一人の大切な人が、病ひの床に見舞ふ事もせで、物見遊山に歩くべき身ならず、御機嫌に違ひたらば夫れまでとして遊びの代りのお暇を願ひしに流石は日頃の勤めぶりもあり、一日すぎでの次の日、早く行きて早く歸れと、さりとは氣まゝの仰せに有難うぞんじますと言ひしは覺えで、頓ては車の上に小石川はまだかまだかと鈍かしがりぬ。

はつねちやう

初音町といへば床しけれど、世をうぐひすの貧乏町ぞかし、

正直安兵衛とて神は此頭に宿り給ふべき大薬罐の額ぎはびかゝとして、これを目印に田町より菊坂あたりへかけて、茄子大根の御用をもつとめける、薄元手を折かへすなれば、折から直の安う

て嵩かさのある物より外は棹さそなき舟に乗合の胡瓜、苞つとに松茸の初物な
 どは持たで、八百安が物は何時も帳面につけた様なと笑はるれど、
 愛顧ひいきは有がたきもの、曲りなりにも親子三人の口をぬらして、三
 之助とて八歳やっになるを五厘學校に通はするほどの義務つとめもしけれど、
 世の秋つらし九月の末、俄かに風が身にしむといふ朝、神田に買
 出して荷を我が家までかつぎ入れると其まゝ、發熱につゞいて骨
 病みの出しやら、三月ごしの今日まで商ひは更なる事、段々に喰
 べへらして天秤まで賣る仕義になれば、表おもてだな店の活計くわしたちがた
 く、月五十錢の裏屋に人目の恥を厭ふべき身ならず、又時節が有
 らばとて引越しも無慘や車に乗するは病人ばかり、片手に足らぬ
 荷をからげて、同じ町の隅へと潜みぬ。お峰は車より下りてそこ處

此處と尋ぬるうち、凧紙風船などを軒につるして、子供を集めたる駄菓子やの門に、もし三之助の交じりてかと覗けど、影も見えぬに落膽がっかりして思はず往來ゆききを見れば、我が居るよりは向ひのがはを瘦ぎすの子供が薬瓶もちて行く後姿、三之助よりは丈も高く餘り瘦せたる子と思へど、様子ようすの似たるにつか〜と驅け寄りて顔をのぞけば、やあ姉さん、あれ三ちゃんさんで有つたか、さても好い處ところと伴なはれて行くに、酒やと芋いもやの奥深く、溝板みぞいがた〜と薄くうすくらき裏うらに入れば、三之助は先へ驅けて、父ととさん、母かさん、姉さんあねさんを連れて歸つたと門口より呼び立てぬ。

何お峰が來たかと安兵衛が起上れば、女房つままは内職の仕立物に餘念あやまなかりし手をやめて、まあ〜是れは珍らしいと手を取らぬば

かりに喜ばれ、見れば六疊一間に一間の戸棚只一つ、箆筒長持はもとより有るべき家ならねど、見し長火鉢のかけも無く、今戸焼の四角なるを同じ形なりの箱に入れて、これがそもく此家の道具らしき物、聞けば米櫃も無きよし、さりとは悲しき成ゆき、師走の空に芝居みる人も有るをとお峰はまづ涙ぐまれて、まづく風の寒きに寝てお出なされませ、と堅焼に似し薄蒲團を伯父の肩に着せて、さぞさぞたんと澤山の御苦勞なさりましたる、伯母様も何處やら瘦せが見えまする、心配のあまり煩ふて下さりますな、夫でも日増しに快よい方で御座んすか、手紙で様子は聞けど見ねば氣にかゝりて、今日のお暇を待ちに待つて漸との事、何家などは何うでも宜おもてござります、伯父様御全快になれば表店おもてに出るも譯なき事なれ

ば、一日も早く快く成つて下され、伯父様に何ぞと存じたれど、道は遠し心は急く、車くるまや夫の足が何時より遅いやうに思はれて、御好物の飴屋が軒も見はぐりました、此金これは少々なれど私が小遣の残り、麴町の御親類よりお客の有し時、その御隠居さま寸白すばくのお起りなされてお苦しみの有しに、夜を徹してお腰をもみたれば、前垂でも買へとて下された、それや、これや、お家は堅けれど他よ處そよりのお方が鼻屑になされて、伯父さま喜んで下され、勤めにくゝも御座んせぬ、此巾着も半襟もみな頂き物、襟は質素ぢみなれば伯母さま懸けて下され、巾着は少し形なりを換へて三之助がお辨當の袋に丁度宜いやら、夫れでも學校へは行きますか、お清書が有らば姉にも見せてと夫れから夫れへ言ふ事長し。七歳のとりに父親

得意場の藏普請に、足場を昇りて中ぬりの泥罌こてを持ちながら、下なる奴に物いひつけんと振向く途端、曆に黒ぼしの佛滅とでも言ふ日で有しか、年來馴れたる足場をあやまりて、落たるも落たるも下は敷石に模様がへの處ありて、掘りおこして積みたてたる切角に頭腦したゝか打ちつけたれば甲斐なし、哀れ四十二の前厄と人々後に恐ろしがりぬ、母は安兵衛が同きやうだい胞なれば此處に引取られて、これも二年の後はやり風俄かに重く成りて亡せられたれば、後は安兵衛夫婦を親として、十八の今日まで恩はいふに及ばず、姉さんと呼ぶるれば三之助は弟のやうに可愛く、此處へ此處へと呼んで背を撫で顔を覗いて、さぞ父さんが病氣で淋しく愁らかる、お正月も直きに來れば姉が何ぞ買つて上げますぞえ、母さんに無

理をいふて困らせては成りませぬと教ゆれば、困らせる處か、お峰聞いて呉れ、歳は八つなれど身軀も大きし力もある、我が寐わしてからは稼てぎ人なしの費用いりめは重なる、四苦八苦見かねたやら、表の鹽物やが野郎と一處に、蜆しづみを買ひ出しては足の及ぶだけ擔ぎ廻り、野郎が八錢うれば十錢の商ひは必らずある、一つは天道さまが奴の孝行を見徹してか、兎なり角なり藥代は三が働き、お峰ほめて遣つて呉れとて、父は蒲團をかぶりて涙に聲をしばらくぬ。學校は好きにも好きにも遂ひひに世話をやかしたる事なく、朝めし喰べるけと馳け出して三時の退校ひけに道草のいたづらした事なく、自慢では無けれど先生さまにも褒め物の子を、貧乏なればこそ蜆を擔がせて、此寒空に小さな足に草鞋をはかせる親心、察して下されとて

伯母も涙なり。お峰は三之助を抱きしめて、さてもさても世間に無類の孝行、大がらとても八歳やっは八歳、天秤肩にして痛みはせぬか、足に草鞋くひは出来ぬかや、堪忍して下され、今日よりは私も家に歸りて伯父様の介抱活計くらしの助けもします、知らぬ事とて今朝までも釣瓶の繩の氷を愁つらがつたは勿躰ない、學校ざかりの年に虱を擔がせて姉が長い着物きて居りようか、伯父さま暇を取つて下され、私は最早奉公はよしますると取亂して泣きぬ。三之助はをとなしく、ほろりほろりと涙のこぼれるを、見せじとうつ向きたる肩のあたり、針目あらはに衣破きぬやれて、此肩これに擔ぐか見る目も愁つらし、安兵衛はお峰が暇を取らんと云ふに夫れは以ての外、志しは嬉しけれど歸りてからが女の働き、夫れのみか御主

人へは給金の前借もあり、それツ、と言ふて歸られる物では無し、
初奉公うひぼうこうが肝腎、辛棒がならで戻つたと思はれても成らねば、お
主大事に勤めて呉れ、我が病も長くは有るまじ、少しよくば氣の
張弓、引つゞいて商ひもなる道理、あゝ今半月の今歳が過れば新は
年るは好き事も來たるべし、何事も辛棒く、三之助も辛棒して呉
れ、お峰も辛棒して呉れとて涙を納めぬ。珍らしき客に馳走は出
來ねど好物の今川焼、里芋の煮ころがしなど、澤山たべろよと言
ふ言葉が嬉し、苦勞はかけまじと思へど見す見す大晦日に迫りた
る家の難義、胸つかに痞への病は癩にあらねどそもく床に就きたる
時、田町の高利かしより三月しばりとして十圓かりし、一圓五拾錢
は天利とて手に入りしは八圓半、九月の末よりなれば此月は何う

でも約束の期限なれど、此中にて何となるべきぞ、額を合せて談合の妻は人仕事に指先より血を出して日に拾錢の稼ぎも成らず、三之助に聞かすとも甲斐なし、お峰が主は白しろかね金の臺町だいまちに貸長屋の百軒も持ちて、あがり物ばかりに常綺羅美々しく、我れ一度お峰への用事ありて門まで行きしが、千兩にては出来まじき土藏の普請、羨やましき富貴ふうきと見たりし、その主人に一年の馴染、氣に入りの奉公人が少々の無心を聞かぬとは申されまじ、此月末に書かへを泣きつきて、をどりの一兩二分を此處に拂へば又三月の延期のべにはなる、斯くいはゞ慾に似たれど、大道餅買ふてなり三ヶ日の雑煮に箸を持せずば出世前の三之助に親のある甲斐もなし、晦日までに金二兩、言ひにくく共この才覺たのみ度よしを言ひ出

しけるに、お峰しばらく思案して、よろしう御座んす慥かに受合ひました、むづかしくはお給金の前借にしてなり願ひましょ、見る目と家内うちとは違ひて何處にも金銭の埒は明きにくけれど、多くでは無し夫れだけで此處の始末がつくなれば、理由わけを聞いて厭やは仰せらるまじ、夫れにつけても首尾そこなうては成らねば、今日は私は歸ります、又の宿下りは春永、その頃には皆々うち寄つて笑ひたきもの、とて此金これを受合ける。金は何として越おこす、三之助を貰ひにやろかとあれば、ほんに夫れで御座んす、常日つねさへあるに大晦日といふては私の身に隙はあるまじ、道の遠きに可憐さうなれど、三ちゃんを頼みます、晝前のうちに必らず必らず支度はして置まするとて、首尾よく受合ひてお峰は歸りぬ。

(下)

石之助とて山村の總領息子、母の違ふに父て、おや親の愛も薄く、これを養子に出して家督あとは妹娘の中にとの相談、十年の昔より耳に挟みて面白からず、今の世に勘當のならぬこそをかしけれ、思ひのまゝに遊びて母が泣きをと父親の事は忘れて、十五の春より不了簡をはじめぬ、男振にがみありて利發らしき眼ざし、色は黒けれど好き様子ふうとて四隣あたりの娘どもが風説うはさも聞えけれど、唯亂暴一途に品川へも足は向くれど騒ぎは其座ぎ限り、夜中に車を飛ばして車くるまちやう

町ちやうの破落戸ごがもとをたゞき起し、それ酒かへ肴と、紙入れの

底をはたき無理を徹すが道樂なりけり、到底とてこれに相續は石油藏へ火を入れるやうな物、身代けふ烟りと成りて消え残る我等何とせん、あとの兄弟も不憫と母親、父に讒ざんげん言の絶間なく、さりとして此放蕩れ子を養子にと申受る人此世にはあるまじ、とかくは有金の何ほどを分けて、若隱居の別戸籍にと内々の相談は極まりたれど、本人うわの空に聞流して手に乗らず、分配金は一萬、隱居扶持月々おこして、遊興に關を据ゑず、父上なくなれば親代りの我れ、兄上と捧げて竈の神の松一本も我が託宣を聞く心ならば、いかにもいかにも別戸の御主人に成りて、此家の爲には働かぬが勝手、それ宜しくば仰せの通りになりましよと、何うでも嫌やがらせを言ひて困らせける。去歳こぞにくらべて長屋もふゑたり、所得は倍にと

世間の口より我が家の様子を知りて、をかしやをかしや、其やうに延ばして誰が物にする氣ぞ、火事は燈明皿よりも出る物ぞかし、總領と名のる火の玉がころがるとは知らぬか、やがて巻きあげて貴様たちに好き正月をさせるぞと、伊皿子いさらごあたりの貧乏人を喜ばして、大晦日を當てに大呑みの場處もさだめぬ。

それ兄様のお歸りと言へば、妹ども怕こはがりて腫れ物のやうに障るものなく、何事も言ふなりの通るに一段と我がまゝをつのらして、炬燵に兩足、酔ざめの水を水をと狼藉はこれに止めをさしぬ、憎くしと思へど流石に義理は愁つらき物かや、母親かげの毒舌をかくして風引かぬやうに小抱卷こまめ何くれと枕まで宛がひて、明日の支度のむしり田作、人手にかけては粗末になる物と聞えよがしの經

濟を枕もとに見しらせぬ。正午も近づけばお峰は伯父への約束ころもと無く、御新造が御機嫌を見はからふに暇も無ければ、僅かの手すきに頭つむりの手拭ひを丸めて、此ほどより願ひましたる事、折からお忙がしき時心なきやうなれど、今日の晝る過ぎにと先方へ約束のきびしき金とやら、お助けの願はれますれば伯父の仕合せ私の喜び、いついつまでも御恩に着まするとて手をすりて頼みける、最初はじめいひ出し時にやふやながら結局つまりは宜しと有し言葉を頼みに、又の機嫌むつかしければ五月蠅いひては却りて如何と今日までも我慢しけれど、約束は今日と言ふ大晦日のひる前、忘れてか何とも仰せの無き心もとなさ、我れには身に迫りし大事と言ひにくきを我慢して斯くと申ける、御新造は驚きたるやうの惘あきれ顔

して、夫れはまあ何の事やら、成ほどお前が伯父さんの病氣、つゞいて借金の話しも聞きましたが、今が今私しの宅うちから立換へようとは言はなかつた筈、それはお前が何ぞの聞違へ、私は毛頭すこしも覺えの無き事と、これが此人の十八番とはてもさても情なし。

花紅葉うるはしく仕立し娘たちが春着の小袖、襟をそろへて褌つまを重ねて、眺めつ眺めさせて喜ばんものを、邪魔ものゝ兄が見る目うるさく、早く出てゆけと疾いく去ねと思ふ思ひは口にこそ出さねもち前の疝癩したに堪えがたく、智識の坊さまが目に御覽じたらば、炎につゝまれて身は黒烟りに心は狂亂の折ふし、言ふ事もいふ事、金は敵薬ぞかし、現在うけ合ひしは我れに覺えあれど何の夫れを厭ふ事かは、大方お前が聞ちがへと立きりて、烟草輪たばこにふ

き私は知らぬと濟しけり。

ゑゝ大金でもある事か、金なら二圓、しかも口づから承知して置きながら十日とたゝぬにまう耄ろくはなさるまじ、あれ彼の懸け硯の引出しにも、これは手つかずの分と一ト束、十か二十かみな悉皆とは言はず唯二枚にて伯父が喜び伯母が笑顔、三之助に雑煮のはしも取らさるゝと言はれしを思ふにも、どうしても欲しきは彼の金ぞ、恨めしきは御新造とお峰は口惜しさに物も言はれず、常々をとなしき身は理屈づめにやり込る術もなく、すごくくと勝手に立てば正午の號砲どんの音たかく、かゝる折ふし殊更胸にひゞくものなり。

お母は、さまに直すぐさま様お出下さるやう、今朝よりのお苦るしみに、潮時は午後、初産なれば旦那とり止めなくお騒さわぎなされて、お老と

しより

人なき家なれば混雜お話しにならず、今が今お出でをとて、生死の分目といふ初産に、西應寺の娘がもとより迎ひの車、これは大晦日とて遠慮のならぬ物なり、家のうちには金もあり、放蕩のらどのが寐ては居る、心は二つ、分けられぬ身なれば恩愛の重きに引かれて、車には乗りけれど、かゝる時氣樂の良人が心根にくゝ、今日あたり沖釣りでも無き物をと、太公望がはり合ひなき人をつく／＼と恨みて御新造いでられぬ。

行きちがへに三之助、此處と聞きたる白金臺町、相違なく尋ねあてゝ、我が身のみすぼらしきに姉の肩身を思ひやりて、勝手口より怕こは々／＼のぞけば、誰れぞ來しかと竈の前に泣き伏したるお峰が、涙をかくして見出せば此子、おゝ宜く來たとも言はれぬ仕

義を何とせん、姉さま這入つても叱かられはしませぬか、約束の物は貰つて行かれますか、旦那や御新造に宜くお禮を申して來いと父さんが言ひましたと、子細を知らねば喜び顔つらや、まづ／＼待つて下され、少し用もあればと馳せ行きて内外を見廻せば、嬢さまがたは庭に出て追羽子に餘念なく、小僧どのはまだお使ひより歸らず、お針は二階にてしかも聾なれば子細なし、若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の眞最中まつたゞなか、拜みまする神さま佛さま、私は悪人になりまする、成りたうは無けれど成らねば成りませぬ、罰をお當てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免ゆるしなさりませ、勿躰なけれど此金ぬすまして下されと、かねて見置きし硯の引出しより、束のうちを唯二枚、つか

みし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して歸したる始終を、見し人なしと思へるは愚かや。

.....

その日も暮れ近く旦那つりより恵あ比び須すがほして歸らるれば、御新造も續いて、安産の喜びに送りの車夫ものにまで愛想よく、今宵を仕舞へば又見舞ひまする、明日は早くに妹共の誰れなりとも、一人は必らず手傳はすると言ふて下され、さてさて御苦勞と蠟燭代などを遣りて、やれ忙がしや誰れぞ暇な身軀を片身かりたき物、お峰小松菜はゆで、置いたか、數の子は洗つたか、大旦那はお歸

りに成つたか、若旦那はと、これは小聲に、まだと聞いて額に皺を寄せぬ。

石之助其夜はおとなしく、新年はるは明日よりの三ケ日なりとも、

我が家にて祝ふべき筈ながら御存じの締りなし、堅くるしき袴づれに挨拶も面倒、意見も實は聞あきたり、親類の顔に美しくしきも無ければ見たしと思ふ念もなく、裏屋の友達がもとに今宵約束も御座れば、一先お暇として何れ春はるなが永に頂戴の數々は願ひまする、折からお目出度矢先、お歳暮には何ほど下さりますかと、朝より寢込みて父の歸りを待ちしは此金これなり、子は三界の首くびかせ械といへど、まこと放蕩のらを子に持つ親ばかり不幸なるは無し、切られぬ縁の血筋といへば有るほどの悪戯を盡して瓦ぐわかい解の曉に落こむは此

淵、知らぬと言ひても世間のゆるさねば、家の名をしく我が顔は
づかしきに惜しき倉庫くらをも開くぞかし、それを見込みて石之助、
今宵を期限の借金が御座る、人の受けに立ちて判を爲たるもあれ
ば、花見のむしろに狂風一陣、破落戸ごろうつき仲間に遣る物を遣らねば此
納まりむづかしく、我れは詮方なけれどお名前に申わけなしなど
ゝ、つまりは此金これの欲しと聞えぬ。母は大方かゝる事と今朝より
の懸念うたがひなく、幾金いくらとねだるか、ぬるき旦那どのゝ處置は
がゆしと思へど、我れも口にては勝がたき石之助の辯に、お峰を
泣かせし今朝とは變りて父が顔色いかにとばかり、折々見るや尻
目おそろし、父は靜かに金庫の間へ立ちしが頓て五十圓束一つ持
ち來て、これは貴様に遣るではなし、まだ縁づかぬ妹どもが不憫、

姉が良人の顔にもかゝる、此山村は代々堅氣一方に正直律義を眞向にして、悪い風説うはきを立てられた事も無き筈を、天魔の生れがはりか貴様といふ悪者わるの出来て、無き餘りの無分別に人の懐でも覗うやうになれば、恥は我が一代にとゞまらず、重しといふとも身代は二の次、親兄弟に恥を見するな、貴様にいふとも甲斐は無けれど尋常なみくならば山村の若旦那とて、入らぬ世間に悪評もうけず、我が代りの年禮に少しの勞をも助くる筈を、六十に近き親に泣きを見するは罰あたりで無きか、子供の時には本の少しものぞいた奴、何故なぜこれが分りをらぬ、さあ行け、歸れ、何處へでも歸れ、此家に恥は見するなとて父は奥深く這入りて、金は石之助が懐ふとこ中ろに入りぬ。

.....

お母様御機嫌よう好い新年をお迎ひなされませ、左様ならば参りますと、暇乞わざとうやうやしく、お峰下駄を直せ、お玄關からお歸りでは無いお出かけだぞと圖分づぶくしく大手を振りて、行先は何處、父が涕なみだは一夜の騒ぎに夢とやならん、持つまじきは放蕩ら息子、持つまじきは放蕩を仕立る繼母ぞかし。鹽花こそふらね跡は一まづ掃き出して、若旦那退散のよろこび、金は惜しけれど見る目も憎ければ家に居らぬは上々なり、何うすれば彼のやうに圖太くなられるか、あの子を生んだ母さんの顔が見たい、と御新

造例に依つて毒舌をみがきぬ。お峰は此出來事も何として耳に入るべき、犯したる罪の恐ろしさに、我れか、人か、先刻の仕業はさつぎと今更夢路を辿りて、おもへば此事あらはれずして濟むべきや、萬が中なる一枚とても數ふれば目の前なるを、願ひの高に相應の員數手近の處になく成しとあらば、我れにしても疑ひは何處に向くべき、調べられなば何とせん、何といはん、言ひ抜けんは罪深し、白状せば伯父が上にもかゝる、我が罪は覺悟の上なれど物がたき伯父様にまで濡れ衣を着せて、干されぬは貧乏のならひ、かゝる事もする物と人の言ひはせぬか、悲しや何としたらよかる、伯父様に疵のつかぬやう、我身が頓死する法は無きかと目は御新造が起居にしたがひて、心はかけ硯のもとにさまよひぬ。

大勘定とて此夜あるほどの金をまとめて封印の事あり、御新造それ／＼と思ひ出して、懸け硯に先程、屋根やの太郎に貸付のもどり彼金あれが二十御座りました、お峰お峰、かけ硯を此處へと奥の間より呼ばれて、最早此時わが命は無き物、大旦那が御目通りに始めよりの事を申、御新造が無情そのまゝに言ふてのけ、術もなし法もなし正直は我身の守り、逃げもせず隠られもせず、欲かしらねど盗みましたと白状はしましよ、伯父様ひとつ同腹で無きだけを何處までも陳べて、聞かれずば甲斐なし其場で舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘とは思しめすまじ、それほど度胸すわれど奥の間へ行く心は屠處としよの羊なり。

お峰が引出したるは唯二枚、残りは十八あるべき筈を、いかにしけん束のまゝ見えずとて底をかへして振へども甲斐なし、怪しきはおちちり落散し紙切れにいつ認めしか受取一通。

(引出しの分も拜借致し候

石之助)

さては放蕩かと人々顔を見合せてお峰が詮議は無かりき、孝の餘徳は我れ知らず石之助の罪に成りしか、いや／＼知りて序に冠りし罪かも知れず、さらば石之助はお峰が守り本尊なるべし、後の事しりたや。

(明治二十七年十二月「文學界」

明治二十九年二月「太

陽「再
掲載」

青空文庫情報

底本：「日本現代文學全集 10 樋口一葉集」講談社

1962（昭和37）年11月19日第1刷発行

1969（昭和44）年10月1日第5刷発行

※底本では送りがな、漢字の使い方に不統一がありますが、底本通りにしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：青空文庫

校正：米田進、小林繁雄

1997年10月15日公開

2004年3月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大つごもり

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>